

ガダマーの遊び論の援用による幼児の表現活動を 読みとるための枠組みの検討

栗原 泰子*

A Study of the Framework which Reads Expression Activities of Infancy by the Play Theory of Gadamer

Yasuko KURIHARA

要 旨

本研究は、幼児の自発的な表現活動を読みとる際の枠組みを検討するために、ハンス・ゲオルク・ガダマーの遊び論を援用して検討を行うことを目的とした。彼は、現代ドイツの解釈学的哲学者であり、昨年102歳で亡くなるまで、精力的に研究をし、また教育を行った人物である。ガダマーの著した『真理と方法』の中の「遊びの概念」の記述を中心に彼の遊びの理論に関する言説から、まず、彼の彼の遊び論について検討を行ったそして、1. 遊びの主体について、2. 遊びの本質について、3. 幼児の遊びについての記述に分けられること、そして、それらの記述を検討することによって、幼児の表現活動へを読みとるための枠組みを考える際のいくつかの視点を見いだした。(1) 活動の主体をどこにおくか。(2) 自己表現としての表現を読みとる。(3) 観衆を前提とした表現活動について考えるの3点である。

キーワード：幼児，表現活動，解釈，ガダマー

1. 問題と目的

幼児の表現活動に関する研究はさまざまな分野の視点から数多く見られる。これらの研究は大きく分けると、音楽的な表現活動、造形的な表現活動、身体的な表現活動、劇的な表現活動、言語的な表現活動などである。これらの多くは、幼児の表現活動を実際に記録することや、で

*教授 幼児教育学

きあがった作品などを分析するものである。そして、これら幼児の表現活動を考察する際には、上述したような様々な分野の理論的な枠組みが用いられることになる。

幼児の表現活動を1つの視点を設けてみていくという方法は、それ自体は妥当なものである。しかし、幼児は表現活動を行う際に、目的をもってその活動を展開しているとは考えられない場合も多く見られる。特にそれが自発的な表現活動であればなおさらである。教師が主導して表現活動を行わせ、それを幼児の表現活動と呼ぶ場合も見られるが、それは真の意味での表現活動とはいえない。幼児の表現活動が、目的が設定された上で、その目的に向かって展開するものではないとするならば、それを読みとる際にもそのことを考慮すべきである。つまり、幼児の表現活動は総合的な活動であるという前提のもとで研究を進めていく必要がある。

幼児の表現活動に関する研究を概観してみると、研究者の多くが、専門領域をベースとしたアプローチを行っている。これは至極当然のことではあるが、音楽、造形、劇、言語、身体というような修飾語を用いることによって、幼児の表現活動を検討する視点としている。これらの用語は、幼児教育の中でこれらが修飾する言葉で置き換えられているが、実際には、研究者の専門領域である音楽、美術、演劇、文学、舞踊など異なる次元での専門領域へとつながるものとしてとらえることができる。したがって、幼児の表現活動を実際に記録することから、つまりその活動の過程に関心をおくことに重点を置き、また芸術領域を専門とする研究者はその出来上がりの作品というように、結果に重点を置いた分析をするというようなアプローチがとられている。これらの研究においては、それぞれの研究者の専門分野の理論的な枠組みが用いられることになる。

また、幼児を対象とした研究は、最近学際的な色彩を帯び、心理学や社会学を専門とする研究者も保育現場をフィールドとして研究を行うようになってきている。また観察方法も開発され、最近ではエスノグラフィーという方法を用いて、研究者自身も保育の中に入り、そこで保育に何らかの関与をし、幼児の活動を読みとっていくということが行われるようになってきている。しかし、記録し、分析された幼児の活動を理解していく上での、その解釈に関しては、まだ検討する余地が残されていると考える。

そこで、本研究においては、幼児の自発的な表現活動を読みとっていくための枠組みを検討することを目的とする。

2. 研究方法

人間の表現活動を総合的に研究する学もとして「芸術学」、あるいは「美学」という学問分

野がある。ここでは、音楽、美術、文学、建築などについて、総合的に論じられている部分がある。芸術学や美学では、プラトンの時代から遊び（遊戯）と関連づけられてそれらが論じられており、また同様に表現そのものについても論じられている。

そこで本研究においては、これら言説を検討することで、幼児の自発的な表現活動を読みとる際の視点となるものを検討することとする。

芸術学に関する文献を検討していく中で、ハンス＝ゲオルク・ガダマーの言説にふれることとなった。彼は、ドイツの現代哲学、特に哲学的解釈学の研究者である。彼の主著である『真理と方法』の中で、彼は遊びの概念について述べている。これは、私自身の幼児の遊びに対する捉え方を転換させるものであった。なぜなら、私自身は、幼児の遊びを状態としてとらえ、そこから幼児の思いをくみ取ろうというようなアプローチの仕方をしてきたからである。しかし、ガダマーは、遊んでいる者を見ることは、観察者の先入観からの分析になってしまうことを示唆していた。「遊びの主体は遊ぶ者ではなく、遊ぶ者を通じて遊びが現れるにすぎない」というのである。ガダマーと出会ったことから、幼児を観察する際に大切なことは、それをどう理解し、その理解を解釈することが重要なのではないかと考えた。

本稿においては、ガダマーの『真理と方法』の中から、「存在論的解明への手がかりとしての〈遊び〉」という論文の中の「遊びの概念」にかかれた言説を中心に検討を進めていくこととする。

3. ハンス＝ゲオルク・ガダマーとについて

ガダマーは1900年2月11日にマールブルクに生まれ、2002年3月13日に亡くなる。20世紀を生き抜いた大哲学者であると言っても過言ではないであろう。その思想的な背景は、師でもあるハイデガーの影響を受け、彼の解釈学においてもその影響は強い。彼は、当時盛んであったシュライエルマッハーやディルタイのいわゆる伝統的な解釈学に対して、彼独自の新しい解釈学をうち立てた。「哲学的解釈学」である。これは常識に逆らって、先入観をわれわれの理解と認識の基礎におこうとするものであり、先入観を判断に先立つ意識・無意識の前提「先行判断」としてとらえている。つまり、我々は何かを理解しようとする場合、自分自身のそれまでの生活の中で培われてきた考え（先入観）で理解しようとする。したがって、先入観を全く持たずに何かを理解しようとする自体が不可能なのであるということである。しかしこの先入観自体がすべて問題となるのではなく、その中には正当な先入観も含まれているので、理解をしている場合には、正当な先入観をもってことに当たらなければならないと述べて

いる。この理解の基盤となるものを彼は「地平」と呼び、この地平は歴史的に変化するものである、我々がこの地平を理解する際に自分自身の先入観の地平を統合していく過程があり、それが「地平の融合」であるとしている。

この「地平の融合」という考え方が、幼児の自発的な表現活動を読みとる際の解釈の枠組みにある示唆を与えてくれた。先にも述べたように、保育現場における研究方法の1つにエスノグラフィーという方法が入ってきている。これは元々は文化人類学の中で作り上げられた方法であるが、研究対象とする人々と共に生活をし、その一員となるまでの長い時間をかけてその生活を記録していくという方法に始まっている。その生活誌をエスノグラフといい、その方法が、教育学に入って来て定着しているのである。教育の世界におけるエスノグラフィーは、教師あるいは観察者が子どもたちの中に入り、ともに生活し、時には援助などを与えながらその子どもたちの活動を記録していく。子どもたちが行っていることの意味や、意図を読みとっていく際に、「地平の融合」がなされる必要がある。もちろん、観察者によってこの「地平の融合」が行われているかのように思われても、時間を経る、あるいは別の観察者が同じ事象を観察したとしても、同一の地平が融合されるとは限らない。なぜなら、そこには観察者個々の先入観が異なったものとして存在しているからである。しかし、異なったものとして存在していることを意識することによって、同じ事象を見ても、単に「羅生門的」^(註)な理解として終わらせるのではなく、より深い解釈へと進むことが可能だと考える。

4. ガダマーの遊び論について

本研究においては、ガダマー著、轡田収他訳 叢書ユニベルシタス 175 『真理と方法』第1巻 法政大学出版局 1986をテキストとする。参照した部分は、第Ⅱ章 芸術作品の存在論およびその解釈学的意義 第1節 存在論的解明の手がかりとしての〈遊び〉、a 遊びの概念 (pp.145-158)である。

(1) 遊びの主体について

たしかに、遊びそのものと遊ぶものの態度は区別することができるかもしれない。そして遊びの態度そのものは、それ以外の態度の在り方とともに主観性に共属していると考えることができるかもしれない。したがってたとえば、遊びは遊ぶ者にとって真剣なことがらではなく、だからこそ遊んでいるのだといえるのである。それゆえ、この観点から遊びの概念の規定を試みることもできるであろう。つまり、単なる遊びは真剣なことではない

が、遊ぶということは真剣なものに対してある独特の本質的関係をやはりもっているのである。それは単に遊びが真剣なものを<目的>としているということだけではない。その点では、アリストテレスが言うように、遊びが行われているのは<気晴らしのため>である。しかしもっと重要なのは、遊びこと自体の中には独特の、そればかりか神聖な真剣さが存在していることである。(中略) 遊ぶ者は、遊びが遊びにすぎず、しかもそれが諸目的の真剣さによって規定されている世界の中で行われていることを自ら知っている。しかし彼がそれを知っていると云っても、それは彼が遊びながらこの真剣さへの関係を自ら考慮に入れているという形においてではない。というのは、遊びがそれ自身の目的を果たすのは、遊ぶ者が遊びに没頭している場合だけだからである。(pp. 145-146) (下線筆者)

この中でガダマーは子どもの遊びについて述べているわけではない。遊び一般について述べている。ここでの主体は大人である。大人の遊びは真剣なことの対極として位置づけられている。しかし下線を付した部分を見てみると、子どもにも共通していることが分かる。なぜなら、幼児は真剣なこと(いわゆるお仕事)と遊びの区別がなされていないからである。「遊びは遊ぶ者にとって真剣なことがらではなく、だからこそ遊んでいるのだといえるのだ」というのは、幼児の主体的な遊びに当てはめてみても納得のいく部分である。幼稚園という場所は、子どもが遊ぶことによって学ぶ場であり、保育者がいくら「〇〇遊び」という活動を設定して、遊びだと位置づけていても、活動の主体である幼児が遊んでいるという実感がなければ、それはもう遊びとはいえなくなる。子どもが主体的に遊んでいる様子をおとなが見れば、それは「真剣なことがら」として受け取ることが可能であるが、幼児の側からすれば、真剣なことがらではなく遊ぶことも可能なのである。「単なる遊びは真剣なことがらではないが、遊ぶということは真剣なものに対してある独特の本質的関係を持っている」とすれば、やはり、幼児の遊びの中にも何らかの真剣なものへの方向性を読みとることが可能になってくるのである。

「遊びがそれ自身の目的を果たすのは、遊ぶ者が遊びに没頭している場合だけだからである」という言説は、まさに幼児の遊びを言い表している。先に述べたように、幼児は遊びと真剣なものとの区別しているわけではない。また、その区別が認知されること自体、幼児教育のねらいから逸脱してしまっていることになる。したがって、まさに幼児が遊びに没頭している時のみ、遊びが遊びとしての目的を果たしている状態であるといえるのである。

また、別の箇所では、「遊びの主体は遊ぶものではなく、遊ぶ者と通じて遊びが現れるにすぎない」(p. 147)と述べている。この言説は幼児教育において遊びを考える際の常識的な遊

びの概念とは相容れないものである。幼児教育において遊びとは、遊ぶ者つまり幼児が主体であり、遊びが客体化されて存在しているというこの主張とは異なったものである。この文章を言い換えるならば、遊びは、遊ぶ者が遊ぶことによって遊びが現れてくるということになり、そこでの遊びの主体は、現実には存在しないものということになる。ここに、遊びの主体と客体の位置が逆転していることを読みとることができる。それでは、遊びの主体とは具体的にどのようなものなのだろうか。これについてガダマーは「遊びの本来の主体は、明らかに他のさまざまな実行行為の1つとして遊びという行為ともしている者の主体性ではなく、遊びそのものなのである。われわれは遊びのような現象を主体性とそれがとる態度に関係づけるに慣れ、その結果、言語の本性によるこのような暗示に対して目を閉ざしてしまっているのである。」つまり、我々が意識的に遊びの主体から目をそらし、あたかも遊びの主体は、遊びという行為をなしている者として位置づけてしまっていることを指摘している。遊びそのものに主体を置き、一般常識の主客逆転を凶ろうとする意図は、その後の文章にも繰り返し現れている。

ここから遊びの本質が遊ぶという態度の中に反映される際の一般的特徴として、次のことを挙げることができる。つまり、すべての遊びは遊ばれることだということである。遊びの魅力、遊びが引き起こす魅惑の本質は、遊びが遊ぶ者をその支配下においてしまうという点にある。自分で課した課題を解こうとするような遊びの場合にも、<なんとかなる>だろうか、<うまく行く>だろうか、<次もうまく行く>だろうかといった緊迫感が存在し、これが遊びの魅力となっている。(中略) 遊びの本来の主体 (これをはっきり示しているのが、まさに遊ぶ者が1人しかない場合になされた経験である) は、遊ぶものではなく、遊びそのものである。遊びとは、遊ぶ者を魅了し、遊びに釘付けにし、引き留めるものである。

このことは、個々の遊びがそれぞれ独特の精神を持っていることによって特徴づけられる。ここで精神といっても、その意味するところもまた、遊びを行う者の気分や精神状態のことなどではない。むしろ、さまざまな遊びを遊ぶ際の、あるいはそういう遊びをしようとする際の、心的状態のこの差異は、あくまでも結果であって、遊び自体の差異の原因ではないのである。 遊びそのものを互いに区別する者はその精神であり、それは他でもない、それぞれの遊びが遊びのあてどない運動をそれぞれ別に規定し、秩序づけることによるのである。ある遊びの本質を決定するのは、その遊びが遊び方を規定する規則なりルールなりである。 (pp. 152-153)

以上のように、遊びは遊ばれることにより、遊びとしての存在意義が派生し、その遊びの本質は、遊ばれ方によって決定されると言う逆説的な彼の言説は、遊びを解釈する際の解釈の枠組みを考える際に、有効なものとなる。つまり、これまで考えられてきたように、遊ぶということは、遊ぶ者という主体が、何らかの意図をもって遊ぶのだということから、遊びは遊ぶ者が遊ぶという行為をすることによって、遊びに主体が決定されると考えることができるからである。遊びはあてどのない運動から、それとは区別されるもの、つまり遊び方を規定するルールなどによって、遊びとして出現してくるという考え方である。そこでは、遊びに何が意図されているのか、あるいは何が遊びを展開させているのだろうか、というように、遊びについて、その原因や刺激や遊ぶ者の思いなどについて詳細に理解しようとする事自体の無意味さが提起されているのである。このような考え方にたてば、遊びについては、それをすべて理解しようとするのではなく、遊びそのものについて意識を焦点化し、主体としての遊びに注目することによって、これまで見えていなかったものも見えてくるようになるであろうし、また、すべて遊ぶ者を主体として理解するという事の無意味さが見えてくるのである。

このことを幼児の主体的な表現活動に当てはめて考えてみると、幼児の自発的な表現活動もまた、何か表現する意図や目的があるのではなく、表現するという行為を通して、表現というものが主体として現れてくるということになる。同じように見えている表現も繰り返されることによって、そこにルールができてきて、それがその表現を規定していくということになる。それを読みとる際には、やはり表現の主体は表現する者を通して現れてくる表現そのものにあるという解釈をすることによって、表現の本質的なものが理解されてくることになるであろう。

(2) 遊びの本質について

それでは、その遊びの本質とはどのようなものなのであろうか。このことについて、ガダマーは次のように述べている。

人間の遊びの特徴は、それがなにかを遊ぶという点にあるように思われる。つまり、その何かが服しているルールに何か特定の性質があって、それを遊ぶ者が<選択>することである。遊ぶ者は、まず自分の遊ぶという態度を、遊ぼうとすることによってはっきりと他の態度と区別する。しかもそのような遊ぶ用意のうちで彼は選択を行うのである。(p. 153)

すべての遊びはそれを遊ぶ人間に課題を与える。彼はいわば、自らの行為の目的を遊びにおける単なる課題に変えてしまう以外には、思うままに遊びを遂行する自由へと解放されないのである。(p. 154)

遊びは事実自己を表現すること以外のなにものでもない。つまり自己表現がそのありようなのである。ところで自己表現は自然の存在の普遍的な様相の1つである。(中略)遊びとは、優れた意味での自己表現である。(p. 154)

遊びの本質は、それが自己表現であるところにあるという彼の言説は、示唆に富むものである。つまり、遊びが何かをするための遊びとしての意図性があるとするれば、自己表現としての遊びではなくなり、目的としての遊びとなってしまうのである。幼児が何かを表現しているとおとなが読みとっている場合を考えてみよう。幼児が自発的な表現活動をしているという解釈には、そこに幼児の内部にあるなにかが表出しているということが前提となっている。その解釈をなくしては、幼児の自発的な表現活動はよみとれなくなってしまう。なぜなら、彼らはそれを人に見せようとか、何か目的に向かって表現活動をしていないからである。表現活動が自己を表現するものであるとするれば、それを解釈する側は、自己の地平で解釈しているにすぎず、ともすれば、「～だから」というように解釈をして納得しているようにみえても、実は、その本質については、解釈することが難しいというのが現実であるからだ。

ガダマーは、遊びが自己表現であるということによって、遊びそのものを解釈するよりも、解釈しえない遊びというものについて提起していると思われる。

(3) 幼児にとっての遊びについて

ガダマーが幼児の遊びについて述べている部分がある。それは、たとえとして出されている部分であるが、幼児の表現活動を考える上で2つの点で示唆に富んでいる。その1つは、目的のない遊びということについて述べている点、もう1つは、それが観客を意識していないという点である。

一般的に言って遊びは、それがいかに本質的な意味の表現であろうとも、また仮に遊ぶ者が自己を表現するものであろうとも、誰かのためになされるわけではない。つまり観客が考慮されているわけではないのである。子どもは、たとえ何かを表現していても、自分のために遊んでいるわけであり、観客の前で行われるスポーツのような競技においてさえ、

本来観客が考慮されているわけではない。

(p. 156)

幼児にとっての遊びは、本来誰かに見られているというような意識で行われているものではない。まさに遊ぶという行為は、自分自身のために行われるものであり、遊ぶという心地よさを十分経験することによって、遊びが発展的になっていくものである。

幼稚園の現場を見てみると、この本来幼児が自分自身のために行っているものが、観客を想定して見せる活動へと発展させられてしまう場合が意外に多いのである。作品展や子ども会、運動会など、さまざまな行事において、子どもたちはステージの上に上げられ、また、見せるための作品を描かされということが行われている。観客を意識することによって、表現活動は表現活動の本質を失い、演じるものとしての表現は、もはや表現活動とは呼び得ないものになってしまうのである。しかし現実的には、このような状況があるのである。それでは、観客を前提としたものについてはどうなのであろうか。ガダマーは、演劇について次のように述べている。

演劇も遊びであり、つまりは自己完結的な世界としての遊びの構造をもっている。しかし一方で演劇は、祭祀的なものであれ、世俗的なものであれ、それが表現する世界がいかに完全に自己完結的な世界であるとしても、観衆に向けていわば開かれているのである。観衆があつて初めて、演劇は完全な意味をもつに至る。演技者がその役を演じるのはすべて遊びの場合と同様であり、こうして演技が表現となるが、演劇そのものは演技者と観衆からなる全体である。そればかりか、演劇は共に演じる側ではなく観ている者によってもっとも本来的な意味で経験されるのであり、本来<意図>されたまま観客に向かって表現されるのである。観る者の中で、演劇はいわばその理念性へと高められるのである。(中略)遊びが演劇になるとき、それは遊びそのものに興る全面的な転換である。この転換によって、観衆が演技者の立場に立つ。演劇は観衆のために、そして観衆によって行われるのであり、演技者の為でも、演技者によってでもない。

(p. 157)

演劇において、演技をするということは、一般的に考えれば、その役を演ずるという点において、もはや遊びではないであろう。ところがガダマーは、この演劇においても、遊びの概念を導入して上のような解釈をしている。この演劇における遊びの考え方は、幼児の表現活動を上演するという場合に当てはめるのは妥当ではないだろう。なぜなら、演ずるということにおいて、幼児は上述のような観客との全体性を考慮し得ないからである。幼児がステージの上で、

何かを演じるという場合においては、観衆を非常に意識する幼児がいる一方で、ステージの上であろうが、園庭の片隅であろうが、全く意識をせずに活動している子どももいる。ガダマーの言うように演技者も遊んでいるという部分を考えると、まさに幼児も遊んでいるということができよう。しかし、演劇のような完結性を持っていないし、全体性もないのである。

5. ま と め

ガダマーの遊びの概念から、幼児の自発的な表現活動を読みとる際の枠組みについていくつかの示唆が得られた。

(1) 活動の主体をどこにおくか

まず第一に、表現活動の主体をどこにおくのかによって、活動を読みとる際の枠組みが大きくかわるということが明らかになった。ガダマーは、遊びの主体は遊ぶ者ではなく、遊びそのものであるという捉え方をすることによって、遊びについて考察を進めている。これを幼児の自発的な表現活動に置き換えて考えてみると、まず読みとる前提として、幼児の活動は、それが表現活動であれ、何であれ、すべて読みとることが難しいということを考えなければならないということである。そして、まさに目の前で展開されている表現活動は、幼児が意図的に表すことを目的としているのではなく、表現することによって表現活動が現れているという見方をしていくことが重要であるということである。つまり、特定の幼児が何かを表現しているからといって、それがある特定の幼児を理解する手がかりとしてだけではなく、表現活動そのものについて検討する必要があるということである。そしてその表現は、表現する者すべてに課題を与えているということ念頭に置くということである。

(2) 自己表現としての表現を読みとる

幼児の生活は遊びである。ガダマーの言うように、遊びが自己表現だとすれば、幼児の生活が自己表現だと言い換えることもできよう。自己表現として幼児の表現活動を読みとることは、「表出」から「表現」へというように、幼児の表現の発達段階に即して語られているところである。つまり、原初的な表現は乳幼児の内面のものを表に出すところの「表出」であり、これは、芸術の始まりについても同様に語られているところである。この表出であれ、表現であれ、それを自己表現であるという読みとり方をすることによって、幼児の内面について、解釈することが可能となる。これまでの幼児の表現活動に関する研究は、このやり方によって

進められてきている。ここでガダマーの言説を援用するとすれば、単に幼児の内面を読みとる手だてとして表現活動を位置づけるのではなく、表現活動そのものを解釈することが1つ必要となってくるであろう。なぜなら、彼は自己が表現されることを遊びの本質だとしているのであるからである。つまり、表現そのものが、表現するものを引きつけることによって、表現が展開されるからである。

(3) 観衆を前提とした表現活動について考える

前述したように、幼稚園においては、表現活動を形のある結果としてのものとして位置づけ、それに向けて子どもたちを指導するということがよく行われている。それは、様々な形で観衆の前で演ずるという機会を幼児に提供することとなる。ガダマーのいうように、演技者と観衆が一体となって遊びとしての演劇が完結するというようなことは幼児教育においてはみられないであろう。しかし、観衆がいるということを前提で演技を要求される幼児にとっても、それは遊びとしての位置づけが必要であろう。子どもの前であるいは、おとなの前で演ずることが、社会性を身につけるというような別の側面での幼児教育とのねらいで行われていることを考えると、一概に否定することはできないであろう。したがって、幼児の表現活動については、いかに観衆の前で演ずることで遊べるかというような視点が必要となってくるであろう。

以上、ガダマーの遊び論を援用することによって幼児の自発的な表現活動を読みとる際の枠組みについて3つのことが明らかになった。幼児の表現を考えた場合、ガダマーの述べているように一般的な（おとな）の表現と共通のものとして考えていって良い部分と、幼児期の特徴的な表現というものも加味して考えていかなければならないのは当然のことである。したがって、具体的な幼児の表現活動場面を取り上げて、実際に表現を読みとることによって、この枠組みを修正していくことが今後の課題となるであろう。

注)「羅生門的」

「羅生門的接近」としてイリノイ大学のアトキンが1974年に開催された「カリキュラム開発に関する国際セミナー」において、自分の立場を表すために使用した言葉である。黒沢明監督の映画「羅生門」において、登場人物が同一の事件・事実を見聞きしたにも関わらず、異なる立場でその事件・事実を記述したり、評価するということから、教育の現場で用いられるようになった言葉である。

栗原 泰子

<引用文献>

ハンス＝ゲオルク・ガダマー、『真理と方法』法政大学出版局，1986，pp. 145－158.

<参考文献>

- (1) E. フフナーゲル、『解釈学の展開』，以文社，1991.
- (2) ハンス・ゲオルク・ガダマー，巻田悦郎訳、『ガダマーとの対話－解釈学・美学・実践哲学』，未来社，1995.
- (3) 栗原泰子，「幼児の表現に関する研究の動向について」，日本保育学会，第52回大会発，表論文集.
- (4) 栗原泰子，「幼児の自発的な表現活動の読みとりについて」，日本発達心理学会第11回，大会発表論文集，2000，pp. 143.
- (5) 栗原泰子，「幼児の表現を読みとるための枠組みの検討」，日本保育学会第54回大会発，表論文集 pp.
- (6) 丸山高司，『現代哲学を学ぶ人のために』，世界思想社，1992.
- (7) 丸山高司，『ガダマー－地平の融合』，講談社，1997.
- (8) 塚本正明，『現代の解釈学的哲学』，世界思想社，1995.